

アカデミックの現場から

見る香川県

さぬき 学びの場



元追手門学院大学
地域創造学部学部長

やすむら かつみ
安村克己 博士（観光学）

（せとうち観光専門職短期大学
観光振興学科学科長予定）

「アフターコロナの時代にも光が一杯あるんじゃないですか、日本にも香川にも！」と熱く語るの、せとうち観光専門職短期大学観光振興学科（仮称）、学科長就任予定の安村克己博士。日本人初の観光学博士である。

神奈川県出身、立教大学大学院博士課程を修了後、教歴は長く、1983年から2019年まで立教大学、産能短期大学、北海学園北見大学、鈴鹿国際大学を経て奈良県立大学と追手門学院大学では学部長を歴任した。

同短期大学の立ち上げ段階から関わり、県内観光地も実際に訪れた。

同氏は、香川には観光客を惹きつける新旧の光（魅力）が一杯あり、それらの再発見が必要だという。観光振興には「よい観光客がよい観光地をつくる」という経験則があり、よい観光客をもっと呼び、更により観光地にすべきだと話す。経験を積んだ観光客は、観光の光を事前に学び、じっくり観るともいう。また、高い付加価値を生み出す観光が日本にも香川にも今後は必要となってくる、と語ってくれた。

地域の光（魅力）とは、五経の一つ、中国古典の『易経』『観』の項にある国（地域）の光を観るという意味。これには『国の光を観る もって王に賓たるによるし』、よその国（地域）の光（魅力）を見ることはよいことだ、客をもてなす時に自国の光を見せるのもよいことだとされて

いる。

観光は本来、格調高い言葉で徳川幕府はオランダから最初に貰った蒸気船に観光丸と名付けた。本家の中国でも使われなくなった観光という言葉は現在、日本だけが使っているという。

「私は、〈観光〉の本来の意味を取り戻し、観光学に用い、観光を国際的な言葉にしたいと考えています。実際、アメリカに、観光学は〈ツーリズム〉ではなく、〈サイトシーイング〉を研究しよう、という学者もいます。

そしていま大切なのは、観光の光を守り鍛えるのに住民も関わることです。近年の観光振興は、一九八〇年代初頃から先進国の周辺地域でみられるようになりました。日本では〈観光まちづくり〉といわれます。

観光振興をベースにして、せとうち観光専門職短期大学（仮称）では、実務はもちろん理論も学びます。そして、どんな観光関連職に就いても本物の観光を支える有為な専門職業人を育てたいと考えています。

『観光新時代をつくる社会現象』『新・産業観光論』『21世紀の観光学』『観光まちづくりの力学』などなど、著作も多い。同短大の付属機関となる「せとうち観光研究所」において、コロナ禍の香川県観光業の実態調査や、『香川県学的観光ガイドブック』制作といった取り組みにも意欲的だ。

欄 告 広